

〔新入社員の声〕

農場の各部署を経験して

立花 碧 晴 (株)シムコ 岩出山事業所)

All about SWINE 54, 28

6ヶ月間にわたり分娩・種豚・AI・育成を研修し、豚の飼養における多くを学びました。

分娩では定型作業の他、母豚と子豚の様子を注意深く観察し、異常の早期発見が求められます。母豚は体調を崩しやすく、治療に長い時間がかかります。治療が長引くと子豚にも影響が及びます。一方で、子豚は母豚に比べ免疫機能や体温管理能力が低いので、事故につながりやすく、母豚の調子が悪い時には里子や人工ミルクの給与などの対策が求められます。分娩は他部署に比べて豚の飼養頭数が圧倒的に多いことから、作業を時間内に終わらせることが難しく、研修中は作業を素早くこなして効率化を図ることを心掛けていました。

種豚の管理は分娩に影響を及ぼしやすく、目視できる結果として現れにくいので、種豚は先のことを想定しながら管理していく必要があると感じました。産歴や品種、前産の子数、BF値などを考慮し、豚の状態を把握できるように注意深く観察するように心掛けました。

AIでは大きな豚を管理しているので、怪我を

しやすく、精液採取や種雄豚の移動には常に豚の動きを把握し注意しました。また、種雄豚の管理と採取精液の取り扱いも細心の注意が求められます。精子の活力は振動や温度及び希釈ショックによって低下しやすく、精子活力が悪い精液を交配に用いても受胎には至りません。しかし、活力評価は目視により行うため主観が含まれるため、採取した状態の活力を維持し、交配に使用できるよう、個体毎に注意深く管理していくことで活力維持に努めました。

育成では離乳及び育成における豚の管理を行いました。離乳では、一豚房が広いため子豚が走り回り異常の発見が難しく感じました。特に好奇心による他個体への攻撃が起立不能につながるのので、早期に異常を発見できるように、動きに注意を払い観察を行いました。育成での体測には豚衡機を用いますが、経験を積むことで目貫による選豚をすることが出来ます。まだ、目貫を身に付けるには至りませんでした。一頭を計測しその個体と比較することで体重を予測することに努めました。